



Title	ブラジルにおける金光教の概況と日系新宗教研究の前提
Author(s)	坂東, 照啓
Citation	ブラジル研究. 2016, 12, p. 43-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジルにおける金光教の概況と

日系新宗教研究の前提

坂東 照啓

0. 序

ブラジルへの日本人移民は1908年に始まったが、すでに第1回集団移民船においても日系宗教（本門佛立宗）の僧侶が布教の意志を秘めつつ乗船しており、百年あまり前の日本移民開始とともに日系宗教もブラジルに渡ったことになる。

ブラジルには、戦前約19万人、戦後約7万人の日本人が移民として渡った。戦前、日本移民のほとんどは、まずサン・パウロ州に入植した。その後、サン・パウロ州に加え、コーヒー栽培に適した土壌の広がるパラナ州北部地方にも多くの日本移民が移り、各地に日本移民集住地が形成されていった。戦後の日本移民は、永住意志を持ってブラジルに渡り、サン・パウロ州を中心に戦前移民によって形成されていた日系社会を足がかりとしつつ、主に農業など第一次産業に就くことが多かった。

永住の意志がなかった戦前の日本移民は、特に、祖国日本の文化、伝統を保持し、葬式や先祖供養の行事において、仏教の僧侶を求めた。戦後になって日本から仏教の僧侶を宗教者としてブラジルに迎える以前は、日本移民の

中で教師資格を持たないながらも、仏教知識と信仰を持ち、読経できる者が僧侶の役目を担った。

ブラジルにおいて、こうした日本の既成仏教に対し、新宗教はどのように活動がなされてきたのか、本稿では金光教の場合を取り上げ、ブラジルでの布教と受容の歴史を概観し、課題を考察する。

1. 金光教について ― 概略

江戸末期に成立した3大新宗教（天理教、黒住教、金光教）のひとつで、現在、信者数43万人、教師数4000人、教会数1600教会。海外も、北米（アメリカ・カナダ）、ハワイ、南米に教会を有している。

1859年に、岡山県浅口市金光町大谷（備中国浅口郡大谷村）にて赤沢文治、後の金光大神（こんこうだいじん）が開き、現在も本部が置かれている。日本における教会の分布も西日本が中心となっている。

教派神道一派である金光教は、崇る神としておそれられていた金神を主神天地金乃神とし、教会の神前（広前）では、基本的に、正面に天地金乃神と金光大神、その左に御霊（先祖）がまつられ、正面上方には天地書附（基本となる信仰姿勢を表した文書）が掲げられている。右手前には、結界と呼ばれる場所が配置され、取次（参拝者の願いを聞き、神へ伝える行為、また、神の願いを参拝者に伝える行為）が行われる。結界では、取次者（教師）は右側の壁を背にして座るので、参拝者に対しては身体の左側に向けた姿勢になる。

教会の発展過程としては、取次を受け、修行をした親教会からの信仰を引き継ぎ、親教会からあらたに子教会（出社）を設立していくという形態をとる。この教会の親と子の関係は、金光教で手続関係と呼ばれ、この親教会と子教会の関係が教会の位置付けの基本となっており、金光教本部との関係よりも直接的で第一義的とみられる。

一般的に、既成仏教に対し新宗教は積極的な布教活動を展開することが多いが、金光教は取次者が教会で参拝者が来るのを待つという基本的態度をと

る。教会の年間行事は、主なところでは、春季霊祭（3月）、天地金乃神大祭（4月）、秋季霊祭（9月）、生神金光大神大祭（10月）だが、すべての教会に共通する行事に加え、教会ごとにも異なるさまざまな行事が存在する。

2. 合衆教会

現在、ブラジルには、1964年に最初に設立されたビリグイ教会をはじめ、7教会が存在する。これらすべて合衆教会の関係教会（出社）であり、合衆教会での教えがブラジルにおける金光教に引き継がれている。

合衆教会は、初代教会長大坪総一郎（1914－1994）が、三井教会での修行ののち、1951年に発足した神愛会での活動を経て、1967年に開所させた教会であり、現在は大坪勝彦が第二代会長となっている。

大坪総一郎が行った金光教の教義解釈は、それまで金光教でなされていた解釈からは革新的で、異端視された。しかし、独自の教義解釈をしつつも、大坪総一郎の取次は現世利益的「おかげ」をつぎつぎと出現させたこともあって、遠方からの参拝者も集めた。関係教会、近隣他教会からも、続々と合衆教会に信者が移り、このことは「信者を奪われた」教会との関係悪化の事態を引き起こした。なお、現在は、初代教会長の教義解釈を、従来の教典に基づく解釈との共通性、連続性を強調する姿勢をとり、本部、他教会との問題はほぼ収束している模様である。

3. 教会布教者側の視点

信者から修行期、さらに布教者となってからも教義の解釈や布教態度に変化が起こる。

3. 1. サンパウロ教会岩井良一からの聞き取り

サンパウロ教会は1978年に設立、教会長は、岩井千恵子で、大祭で、およそ60人から70人程度の参拝者、日曜日の例祭で30人程度の参拝者。岩井良一は千恵子の長男で、日常の外部とのやりとりは、主に良一が行って

いる。

岩井良一は 1967 年福岡市生まれで、幼いときに父が交通事故死したため、母ひとり子ひとりの母子家庭で育つ。母は、合衆教会に毎日朝参りをしていた信者で、さまざま仕事を变えながら、良一を育てるが、1976 年、良一が 9 歳のとき、合衆教会に修行に入る。このとき、良一は叔父の家に預けられたが、12 歳、小学校 6 年生の後半には、母が修行をしている合衆教会に移った。

久留米農芸高校を卒業し、18 歳で教会修行に入ったものの、19 歳でいったん教会を出る。九州北部の親戚の家や、賃貸アパートなどで、いくつか仕事を变わりながら暮らしていたが、21 歳のとき、現ビリグイ教会長末永建夫の誘い、説得で、合衆教会に戻り、1989 年、22 歳でブラジルに渡り、ビリグイ教会での修行に入った。金光教学院に入学のため、1993 年日本に帰国し、1994 年学院卒業、教師資格を得て、ブラジルに戻る。この年、母千恵子がブラジルに渡り、半年間、母とともにビリグイ教会で暮らした。

1995 年サン・パウロ市、Vila Sônia 区の部屋を借り、ここで千恵子と良一が教会活動をはじめる。1997 年 3 月、現在の Vila Mariana 区の土地家屋を購入して移転した。

3. 2. ビリグイ教会長夫人末永公子からの聞き取り

ビリグイ教会は 1964 年の設立、教会長は末永建夫。大祭での参拝者は、150 人から 180 人程度である。

末永建夫は、現地の要望で、1964 年、妻公子、2 人の子供とともにブラジルに渡る。末永は合衆教会最初の修行生であった。

ビリグイは当時人口 4 万人ほどの地方都市ではあったが、日系人の多い地域であった。しかし、既成仏教寺院で得られるような葬式、法事（年忌法要）による収入（布施、お供え）がなかったため、生活苦を経験する。（サンパウロ市の仏教寺院の法事であれば、最低給与の 1 ヶ月分（2013 年時点、678 レアル）が布施の基準となっている。なお、物価の目安として、地下鉄 1 回乗車券 3 レアル、コーヒー（エスプレッソ）一杯 4 レアル程度）

さらに、ビリグイにおける受け入れ者 N 氏とは、気が合わず、経済的だけではなく、当初の同居時期は精神的にも疲労した¹。

4. 信者側の視点―入信過程

非日系人で、金光教に入信し、教師資格を得た Solange Santana dos Santos 師から聞き取りを行った。

Santos 師は、1954 年リオ・デ・ジャネイロ市生まれで、2007 年ごろ金光教入信し、2010 年教師資格を得ている。入信動機は、親族の病気、家庭問題に対し、ブラジルの宗教として大勢を占めるカソリックやプロテスタントでは、十分に受け入れられるような回答を得られなかったということがあり、そのときに出会った金光教の考え方の素晴らしさにひかれたという。

その後、末永師から指導を受けさらに金光教の信仰、理解を深めていった。

5. 布教課題

日系人が中心的に関わってきた教会では、日系人の信者集団の中にある閉鎖性や、非日系人に対する心理的な壁が存在してきた。日本で生まれ育ち、ブラジルに渡った布教者は、現地文化を理解し、現地社会への適応をはかりながら、日系人の信者集団とも付き合っていく必要があった。現在では、この非日系人への心理的な壁は消えつつあり、非日系人も以前より、多く参拝するようになっている。このことに加え、日系人であっても、すでに 3 世、4 世であれば、多くは日本語を解さないのが、現地語の使用が必須となってきた。

2012 年に設立され、現地生まれの教師が着任した、リオ・デ・ジャネイロ教会の場合であれば、当初から現地のブラジル人の教会として出発している。

既成仏教でも同様であるが、布教者自身も指摘することのある言葉の問題

¹ 末永公子師が自身の合衆教会との関わり、ブラジル布教について、2013 年の合衆教会初代教会長夫人十年祭のときに、資料 1 のように語っている。

も、教義や教典の内容を現地語での確かな表現をし、教学的にも認められる教典翻訳を進めるということとともに、日々の信者への対応では、それを現地で普段使用される日常の平易な言葉で説き、理解してもらわねばならない。このため、布教者は、現地文化になじみつつ日常会話を身に付けるとともに、かつ正確な文法を習得して、教養のある文章語を駆使し、高度な翻訳作業も進めなければならない。

さらに、文化的に、ブラジルの宗教背景として、カソリック国でありながら、複数の宗教と関わることに抵抗がなかったりもするが、金光教が行うような先祖の御霊を祀る行為に、強い拒否反応を示す場合もある。現世利益的「おかげ」を与えることができれば、信仰に導く入口とはなるが、信仰の継続性や深化を導くためには、布教者個人の感性であったり、教団が組織的に提供する手段が有効であろう。一般化が容易ではないブラジル人の宗教観を、最大公約数的にとらえた上で用意する教化材料と、現場教師が個人的に対応する感性がかみ合うことが理想と考えられる。

6. おわりに

1970 年頃には日本が高度成長期に入ってブラジルへの移民もほぼ終了しており、今後も新たな移住者の見込まれない。ブラジルにおける日系人の人口は 150 万とも推定されているが、戦後移住者もすでに高齢に達しており、日系人であっても大多数は日本語・日本文化に通じているわけではない。

日系既成仏教寺院の例を見ても、現地化は、表面的な部分だけでなく教義解釈面での変容（異端化）にもつながりうる。しかしながら、現地文化の中で、日系、非日系を問わずブラジル人への布教は進めなければならない。

日系既成仏教の場合は日系コロニアにおいて、日本文化の代表のひとつという役割も担ってきた。日系の式典などでも、宗教関係の代表は、カソリックと仏教で、そのため、日系既成仏教は、日系コロニアに護られてきたし、またそれが故に、日系の枠に縛られる面もあった。これに対し、日系新宗教は、日系コロニアでの宗教、文化の代表とされるような位置にないため、かえっ

て日系にとらわれることなく、ブラジル人布教に移行しやすかったと考えられる。

参考文献

井上 順孝. 1985.『海を渡った日本宗教—移民社会の内と外』 弘文堂.

森幸一. 1991.「ブラジルに於ける日系人の宗教生活と日系宗教」ブラジル日本移民
80 年史編集委員会編『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会,
pp.417-449.

渡辺雅子. 2004.『転換期を迎えたエスニック・チャーチ —ブラジル日系社会にお
ける伝統仏教の模索—』明治学院大学社会学部付属研究所年報 34. pp.169-185.

資料 1

「大坪五十枝姫之霊神十年祭 祭詞 平成二十五年三月十五日」

畏(おそ)れ多いことでございますが 是の金光教合衆教会初代教会長夫人 大坪五十
枝姫之霊神様(みたまのかみさま)の御前(みまえ)にブラジル・ビリグイ教会 末永公
子 謹んで申し上げます

大奥様おかげを頂きまして有り難うございます。今日は大奥様の十年祭をお仕えさせ
て頂いて、勿体ない気持ちでいっぱいです。お祭りを仕えさせて頂いておりましたら、
在りし日の大奥様のお姿が走馬灯のように目に浮かんできました。

私が小学校三、四年生の頃、直子先生や幹三郎先生を負ぶって子守りをするのが私の
日課でした。何時間かして教会に帰ると、大奥様はその当時では珍しいインドリング
を半分に切って下さったものでした。そのおやつを頂くのが嬉しくて、毎日通ってい
ました。

栞目時代の大奥様は決してきれいな事ばかりではありませんでした。裏方の台所に徹し

て食事の準備とお世話で、時には腹を立てておられたお姿も、ずいぶん見てきました。栞目では日曜日の朝は、よくカレーを作っておられました。ある時、食事の時間に来合わせたご信者さんに対して、「内の家内はバカン事して、朝からカレーどんしとりますけど、どうぞ」と、初代は謙遜して言われたのですが、それに対して大奥様は、「私はバカと言われたから」と言って、大変腹を立てておられましたね。そして、手を後ろに組まれて台に寄りかかり、カレーを出す事をされず、初代は大変困られて、「公子ちゃん、早うカレーを出してくれんの」と言われて、私がどうしてよいか分からず困った事がありました。また、いつもお昼の食事の時間になると、必ずこられた人がいて、「またあの人が来ちゃった」とブツブツと言いながら、黙って食事を作りながらも、人の前では決して嫌な顔一つ見せられませんでした。

初代親先生は、「エプロンが奉仕着」と言われてましたが、大奥様が食事を作られる時の心遣いは、私の心にも焼き付いております。野菜の切り方一つにしても、少ない材料をどうしたら多くできるか、いつも工夫されていました。また、スマ代おぼりちゃんと五合のお米だけのお粥さんを二人で食べられたお話は、後になって大奥様が、あんなにお腹を抱えて大笑いされながら、「ようもスマちゃんと二人であれだけのお粥さんを食べたもの」と何度も何度も話された、あの大奥様の笑い顔は忘れられません。

ご修行時代、ほとんどお米のなかった頃、お腹いっぱい食べられることのなかった大奥様のお姿を、その時思わせて頂きました。大奥様のそのようなご修行をして頂いたおかげで、今ビリグイ教会では、お米を買わないで済むおかげを頂かせて頂いております。

そして、大奥様の辛抱強さには本当に頭が下がりました。ある時、歯の痛み辛抱できず、手でほほを押さえ込みながら、常持の歯医者さんに行こうと、バス停に立っておられたお姿をよく見ました。結局、大奥様は常持に行かれる事なく、栞目の台所に帰っておられましたね。そして、合衆で思い出話のようにして、歯の痛みだけはもう辛抱できないと思った」と何度もおっしゃいましたが、本当に歯の痛みにも大変なご修行をされ、辛抱をされましたね。合衆に移って田主丸の深川さんで一遍に歯を抜かれて顔がすごく腫れられて、この時また、初代から、「一遍に歯を抜いてから」と、

大変叱られましたね。

昭和三十六年、十五歳の時でした。中学校卒業と同時に、就職のため、東京の二葉鮎に行きました。その当時、中卒での県外就職はなかった頃でした。明日出発という前夜、御結界にお届けに行きましたら、頭が上がりず声を上げて泣きました。その時、初代が、「かわいそうだけど、東京は御神意だからね」と言われて、大奥様も、スマ代おばちゃんも一緒に泣いて下さいましたね。でも、二葉鮎での人間関係や、子供ながらに働かせて頂いた事が、南米で役に立ち、私の辛抱させて頂ける元にもなりました。

昭和四十二年四月に東京から六年ぶりに帰らせて頂いた時、ちょうど栳目から合衆へ移られた時でした。当時、大奥様がお一人で大変だと思って、ちょっとお手伝いのつもりで合衆で御用させて頂きましたら、一年が二年、二年が三年になり、気が付いた時には学院に行っておりました。

もう四十年も前の事ですけど、初代が「南米布教」というお知らせを頂かれました。その時、初代は、「南米には末永さんと公子さんを一緒にさせて行かせる」と言われ、これが南米布教のお話の始まりでした。その三年後、信太郎二歳、静行一歳、懷妊五か月のお腹を抱えての南米行きでした。

その南米へ旅立つ前に、大奥様より、「神にすがりて」というお言葉を頂きました。それは、大奥様ご自身が栳目時代から神様におすがりされてのお姿そのままのものだと思っています。

南米布教と言われても、私はその意味すらも分からず、ただ先生に無我夢中で付いていき、大奥様から頂いた「神にすがりて」のお言葉におすがりするより他ありませんでした。

特に出産の時、四男・道典の時は、赤ちゃんが下におりなくてはいけないのが上にあがってきて、私は息ができなくなった時、もう死ぬと思いました。必死で「大奥様」と唱え続けました。また、子供一人一人が、病気で死ぬか生きるかという死線を越えさせて頂き、必死でおすがりさせて頂きました。

布教当初は、合衆と同じく、月例祭は一日・十日・十八日・二十三日でした。その時の月例祭のお下がりで次の月例祭までおまかない頂くという生活でしたので、月例祭

にお供えがないと、いつも心配でした。けど、その折々に大奥様におすがりさせていただきました。

確かに、食べ物になかったりする事が一番心配でした。特にご神飯だけは切らしてはいけないうと、いつも心にかけておりました。でも、たくさんのお芋、カボチャとお供え頂いて、ご飯代わりにさつまいもをお腹いっぱい食べ、芋いっぱいのお粥さんを頂かせて頂く事ができました。一日とてお腹を空かした事はありませんでした。初代、大奥様のご修行に比べれば万分の一にも満たない修行でした。

またある時、先生が、「これ以上は家賃が払えないので、雨露が凌げるだけの所に引っ越さねば」と言われた時は、本当に心配しました。その時も夢のような、うそのようなおかげを頂きました。

サンパウロのほうにおられたあるご信者さんが、神様に約束されたお話を後で聞いたのですけど、国家試験に合格したら、これこれのお供えをしますという事だったそうです。そして、家賃の全額のお供えがありました。この時は、本当に驚きました。初代のお徳、大奥様の祈りを実感致しました。

大奥様のお側で御用させて頂いたおかげで、南米で辛抱できない所を辛抱させて頂く事ができました。気性の激しい、気の強い私をここまで受けて下さり、どれほどご迷惑をお掛けしたか、歯がゆい思いをさせたか分かりません。

初代親先生、大奥様のお徳のおかげで、南米では、今年三男の満がりオデジャネイロに布教させて頂いたのを含めて今日七教会、人の助かる教会としておかげを頂いております事は、本当にお礼を申し上げる他ありません。

今、合衆では天地日月の心、また実意丁寧神信心の取り組みを教えて頂いております。私達は大奥様が残して下さった土の心を信条として、私自身が助かり、そこからお役に立たして頂きたいと思ひます。不行き届きながらもお使い頂きました事をお礼申させていただきます。有り難うございました。